

おわりに

筆者が研究をはじめた当初、削りかけはすでに過去に属するテーマであった。とはいえ、本論を通して述べてきたように、当時は削りかけの分布ですら精確には把握されておらず、議論は民俗学的な解釈論のなかに閉じられていた。そうした従来削りかけ研究——あるいは民俗学の方法論の在り方に対するささやかな疑問が、この研究を一面では支えてきたと言ってよい。削りかけをもう一度議論の俎上にのせること、しかもそれを、古臭い、失われゆく習俗への郷愁としてではなく、いかに現代の問題として捉えなおすことができるのか、それが当面の課題でもあった。

そうした模索のなか、研究開始当初から関心を抱いていた樹木というものが大きな存在としてクローズアップされてきたのは、偶然、植物生態学の知識に触れる機会が重なったことがきっかけであった。削りかけの材となる樹種には先駆種が多く、それは人為的な生態系を好む性質を持つ。そのたったひとつの事実が、削りかけという祭具を人と自然との関わりという視点から捉えなおすための欠くことのできない道標となり、関心は里山論やコモンズ論、環境学など、自然／人間をめぐる様々な分野へと広がった。とくに里山論に関しては、折りしもブームのように矢継ぎ早に関連書籍が刊行されていた時期でもあった。しかし、そのいずれにおいても感じたことは、そこに豊かな人間像というものがじゅうぶんに描かれていないのではないかということであった。そこでは、自然に対する人間の働きかけは、そのほとんどが農耕——しかも水田稲作——に関わるものとして、深みに欠ける定型化された表現で語られていた。里山に関わる研究の場が、西日本に大きく偏っているのも気にかかった。

こうした傾向は、現在里山に関わる議論を主導しているのが植物生態学や環境学、あるいは哲学などの分野の研究者であることと無関係ではあるまい。しかし本来、里山という場とそこに関わる人間、その暮らしぶりにもっとも寄り添い、豊かに、そして緻密にその姿を描いてきたのは民俗学ではなかったか。いま里山論に、民俗学の立場から何か言える

ことはないか。それが本論のもうひとつの隠れたテーマともなった。人と人為的生態系との関わり、応酬のなかには、生業活動だけではなく、削りかけを祭るといったような精神活動も含まれるのではないか、それが本論の、ややもすると当たりまえにすぎる、そして些細な、もうひとつの主張であり結論であったといえる。

人と自然との関わりの在り方を描くという本論の意図は、いまだ試論の段階にある。膨大な資料の山との格闘を経て第Ⅰ部をまとめ、ようやく研究の入口に立ったのが、第Ⅱ部である。多くの問題は宙づりになったまま、未来への課題として残されている。しかしそれでもなお、削りかけを削りかけとして論じるのではなく、自然との関わりのなかにそれを描きだしてみたかった。削りかけという、この小さなモノのなかに込められた、人と自然とをめぐる壮大な交渉史、世界の一端でも描けたのならば、本研究の目的は果たされたといってよい。

謝辞

本論をまとめるにあたっては、実に多くの方々にご指導とご協力、また励ましをいただきました。いつも真に暖かい言葉と励まし、そしてアドバイスをくださった野本寛一先生や川野和昭先生、東大寺や福井県の調査にお誘いくださり、貴重なご意見をいただいた金田久璋先生、また、アイヌに関わる研究については大塚和義先生にご指導をいただき、当初より削りかけ研究に対する励ましもいただきました。植物学の中川重年先生には、本研究を進めていくうえでも貴重な、欠くことのできない視点をご指導いただきました。アートディレクターである猫丸氏には、たくさんのアドバイスとご支援、励ましをいただき、とくに紀伊山地の調査に関しては大変にお世話になりました。また、芸工大への赴任前から暖かいご指導と励ましをいただいた入間田宣夫先生、人と自然との関わりの在り方について現場における貴重な体験をさせていただき、また方法論についても様々なアドバイスをくださった田口洋美先生にも、心から感謝申し上げます。このほかにも、ここには書ききれない多くの先生方、諸先輩、友人の支えがなければ、本研究をまとめることは果たしえませんでした。

また何より、多くの場合突然の訪問者であった筆者を暖かく受け入れて下さり、有意義で楽しい時間をくださった全国の調査地のみなさまに、深く御礼を申し上げます。ひとつひとつの出会いが代え難く貴重であり、学問を続けていくうえでの心の糧でもありました。

最後になりましたが、八年近くに渡りご指導をいただき、学問の楽しさ、奥深さをはじめ、実に様々な教えをいただいた赤坂憲雄先生に、心より深く感謝申し上げます。削りかけの研究は、修士課程において民俗学を志してから追いかけてきたテーマであり、民俗学という学問における、ささやかながらの研究の個人史そのものでもあります。幾度もの逡巡や挫折を経て、現在まで研究を続けてこられたのは、赤坂先生をはじめ、みなさまのご指導と暖かい励ましがあってこそでした。今後のさらなる精進と研究の進展を約束し、感謝の気持ちと代えさせていただきたいと思います。

